

## ストラスブール語学研修 研修レポート

文学部 仏文第2 2年 下川真布 011700367

本レポートでは、1) ストラスブールで学んだ、あるいは獲得した3つのこと。について述べる。

ストラスブールで私が学んだ、あるいは獲得した3つことは、「言語習得の楽しさ」、「海外渡航に対する抵抗感の軽減」、「フランスと日本の働き方の違い」である。

まず、「言語習得の楽しさ」について述べる。正直に言って、私はこれまでの人生で、言語習得にとっても苦手意識を感じていた。英語もフランス語も、これらの言語圏の文化や生活にはとても興味があったが、言語自体や、これらの言語を巧みに話せるようになることについては、あまり関心がなかった。しかし、この研修に参加したことで、生まれて初めて、もっと外国語（今回の場合はフランス語）を喋れるようになりたいと思った。

ある夜、日本語学科の学生たちと夕食を食べに行ったときのことだ。わたしは、前に座る2人の日本語学科の学生と話していた。「将来、どういう仕事がしたいか」という話題になった。「映画の翻訳をしたい」「まだ何も決めていない」と2人は答えた。私自身は、大学で学んでいるフランス語やフランス文学を生かせる職業に就きたいという思いはあるものの、日本で就職したいと考えていて、そして日本でそのような職業に就くのは大変なことであると思っているため、一般企業への就職を主に考えている。「会社員になろうと思っている」という私の言葉に、2人は頷いてくれた。「日本では、文学に関わる仕事に就くのは難しい」2人は困惑した表情を浮かべた。私のたどたどしいフランス語では伝わらなかったようだった。私は何度も繰り返し発音したり、電子辞書で単語を調べたり、あの手この手で「日本では、文学に関わる仕事に就くのは難しい」を伝えようとした。1つのセンテンスを伝えるのにこんなに時間がかかっているのは、相手の迷惑かもしれない。今までの私であったら、ここで愛想笑いを浮かべて、うやむやにして会話を打ち切っていたかもしれない。しかし私は、ここでそんな振る舞いをしてしまったら、12時間も飛行機に乗ってここまでやって来た意味がなくなってしまうと思い、必死になっていた。そのうち、一方の学生がはっとひらめいたような顔をして、まさにそれだ！というフランス語を言ってきた。もう一方の学生もそれを聞いて、納得したような声をあげて大きく頷いている。私の言いたいことが伝わった、と分かった瞬間に、私は達成感と、「もっとフランス語を話せるようになりたい」という思いを強く感じていた。

私は今回の語学研修で、日本で勉強しているだけでは味わえなかった、言語を学び、話せるようになることの楽しさを獲得することができたと思う。

つぎに、「海外渡航に対する抵抗感の軽減」について述べる。語学研修に参加できることが決まり、出発も近づいてきた頃、私は初めての海外渡航に対する興奮と不安を感じていた。研修前の私にとって、海外渡航は大それたことで、何かの試練のようにも感じられた。しか

し、研修に参加したことで、たしかに海外に渡って生活することは簡単にできることではないが、困難を極めるものでもない、と思うようになった。会話をするとき、私はおぼつかないフランス語で必死に意図を伝えようとして、その一方で話す相手は、推測と検証を繰り返して私の意図を汲み取ろうとしてくれていた。とっさに言葉が出て来なかったり、言い方を間違えてしまったりしたときでも、間違った言い方のままで、あるいは身振りや表情で相手に意図を伝えることができた場面が何度かあった。朝食室で、いつも世話をしてくれた情勢にオレンジジュースを頼んだとき、和製英語の発音で「ジュースをお願いします」と頼んだ時、わたしが見ている方向から「ジュースってことね？」とこちらの意図を推測して理解してくれた。日本語学科の生徒と話しているとき。とっさに言われたことに対して、返す言葉が見つからなかったり、ありきたりな単語しか話せなかったりしたときでも、その言い方の抑揚や声のトーンで、相手に自分の意図を伝えることができた。

この語学研修の目的が語学力の向上である以上、あまり良くない考え方もかもしれないが、語学がとても堪能ではなくても、海外に渡って生活し、異なる言語圏に住む人々とコミュニケーションをとることは困難ではない、ということを知ることができたと思う。

さいごに、「フランスと日本での働き方の違い」について述べる。語学研修中に、街中を観光していて驚いたことは、皆が自由に働いているように見えたことである。自由という言葉は言い換えれば自分のスタイルで、ということで、日本のような「こういう場合にはこういう振る舞いをしなければならない」といったマニュアルがある訳ではなく、各人がその日の体調や気分を考慮しつつ、自分が「こういうときはこう振る舞うべき」と思う行動をとっているように見えた。日本のように言葉遣いや時間にプレッシャーを感じながら働いていないことは、ある意味で気楽さにつながり、その気楽さが、自分の仕事を楽しめることにつながっているように感じた。店員さんにあんなに輝く笑顔を見せられたのは何年ぶりのことだろうと思った。

今回の研修で、日本とは異なるフランスの人々の働き方について学ぶことができたと思う。